

岩手県における伝統的民家の間取りの成立・発展と地域的展開 — 3列型を主に — (I)

高橋 宏 一

1. はじめに

筆者は岩手県内の伝統的民家（農家）を対象として、南部曲家の成立過程や馬産との関連、さらには曲家か直家を問わず間取りの文化系統と発展過程に関心を持ち、研究を行っている。それは、現在の岩手県が旧南部藩領と旧伊達藩領から成り立っているため、近世において異なる文化領域が形成され、それ以降互いの異なる文化要素の伝播と受容に伴う文化変容が旧藩境域を中心に展開されている興味深い地域だからである。そこで、まず岩手県内の伝統的民家（農家）943図のデータベースを作成した上で、県内の民家形態や間取りの幾何学的な形態を中心として、各要素の県内や旧藩領内での地域的な分布状況を概観した（高橋2017）。さらに、前稿（高橋2022a・b）では、データベースに新たに50図を追加した上で、2列型の伝統的民家にみられる異なる間取りタイプ相互の関連とそれらの地域的展開を明らかにし、2列型民家の成立と発展について考察した。

本稿は、前稿の2列型の場合と同様の分析視点ならびに分析方法に基づいて、3列型の間取りの成立・発展とその地域的展開について分析・考察を行うものである。そのため、分析視点や分析方法についての詳細な説明については、高橋（2022a pp.145-149）を参照して頂きたい。なお、本研究で言う列数とは、土間部分を除いた床上の居住部分が、母屋の棟方向に直交して何列に分割されているかを示したもので、旧土間に張り出した勝手やダイドコロ等は列数としては数えていない。

ただし、以下に述べるように、本稿では前稿とは異なる論文構成で分析・考察を行うことにした。前稿では、まず下手列および上手列の室数の組み合わせにより、 2×2 型等の間取り型に分類した。そして、各型毎に広間タイプおよび座敷タイプについて分析・考察した上で、両者の組み合わせで規定される間取りタイプの分析・考察を行い、各型の間取りの成立・発展について論じた。しかし、間取り型が異なっても各列の室数が同じ場合は、それらの広間タイプや座敷タイプの分析・考察の結果にあまり違いは無く、重複することも少なくない。それは本稿が対象とする3列型でも同様なので、本稿では広間タイプおよび座敷タイプの分析・考察を間取り型毎には行わず、各列の同じ室数毎に一括して行い、その結果をふまえて各型の間取りタイプの分析・考察を行うことにした。

また、3列型間取りの場合、広間がある下手列や座敷がある上手列に加えて、両者の間には主に寝室・収納室や次の間・座敷が置かれる中手列が存在する。そのため、各列の室数（2室または3室）に応じて間取り型に分類すると、 $2 \times 2 \times 2$ 型、 $3 \times 2 \times 2$ 型等の8つの型が生じる。しかし、8型に分類すると、各型に含まれる間取り図が少なくなり、各型の一般的特徴

が読み取れなくなることや、2列型で行った判別分析およびクラスター分析を行える型に限られることになる。さらに、2列型の間取りタイプと比較する上でも、3列型の間取りタイプを規定するためには、中手列の室数や室機能を捨象せざるを得ない。そこで、3列型の間取り型の分類も下手列と上手列の室数に基づいて行うことにした。つまり、例えば2×2×2型と2×3×2型はまとめて3列2×2型とし、他にも同様に中手列室数にかかわらず、3列3×2型、3列2×3型、3列3×3型の4型に分類することとし、中手列の室数は必要に応じて考慮することにした。

2. 3列型間取りとその地域的分布

(1) 3列型間取りの地域的分布

まず、3列型間取りが岩手県内でどのように分布しているのを見てみる。表1に本データベースにある全993の間取り図について、旧郡別に列数別の間取り図数を示した¹⁾。3列型の間取り図は257図で、全体の25.9%を占めている。が、3列型の占める割合が、九戸郡、岩手郡、胆沢郡では1割にも満たない一方で、上閉伊郡、和賀郡、江刺郡では過半を占めており、3列型間取りの分布が地域的に偏っていることが分かる。さらに、図1で旧市町村別に見ると、総間取り図数が10図以上でかつ3列型が50%以上を占めているのは、上閉伊郡遠野市(79図/121図²⁾)、稗貫郡大迫町(10図/16図)、和賀郡東和町(10図/15図)、和賀郡沢内村(10図/11図)、和賀郡湯田町(9図/10図)、江刺郡江刺市(7図/13図)、気仙郡陸前高田市(12図/23図)の7旧市町村で、紫波郡紫波町(16図/34図)や東磐井郡藤沢町(25図/57図)でも40%を超えて

表1 旧郡別にみた列数別間取り図数

旧藩	列数 旧郡	(図数)					(構成比)				
		1列	2列	3列	4列	合計	1列	2列	3列	4列	合計
旧南部藩領	九戸郡	1	68	5		74	1.4%	91.9%	6.8%		100.0%
	二戸郡	14	100	14		128	10.9%	78.1%	10.9%		100.0%
	岩手郡	2	98	3		103	1.9%	95.1%	2.9%		100.0%
	紫波郡		48	16		64		75.0%	25.0%		100.0%
	下閉伊郡		42	8	1	51		82.4%	15.7%	2.0%	100.0%
	上閉伊郡	4	43	83		130	3.1%	33.1%	63.8%		100.0%
	稗貫郡		23	15		38		60.5%	39.5%		100.0%
	和賀郡	1	15	29	1	46	2.2%	32.6%	63.0%	2.2%	100.0%
旧伊達藩領	江刺郡		12	13		25		48.0%	52.0%		100.0%
	胆沢郡		116	11		127		91.3%	8.7%		100.0%
	西磐井郡		17	3		20		85.0%	15.0%		100.0%
	東磐井郡		102	41		143		71.3%	28.7%		100.0%
	気仙郡		28	16		44		63.6%	36.4%		100.0%
岩手県計		22	712	257	2	993	2.2%	71.7%	25.9%	0.2%	100.0%

1) なお、高橋(2017)の表1(p.4)には、50図追加される前の943図について、列数別の図数等が掲載されている。が、西磐井郡と東磐井郡の列数別図数および構成比が取り違えて掲載されているので、お詫びして訂正したい。

2) 当該旧市町村の全121図中79図が3列型の間取り図であることを示す。以下の旧市町村についても同様である。

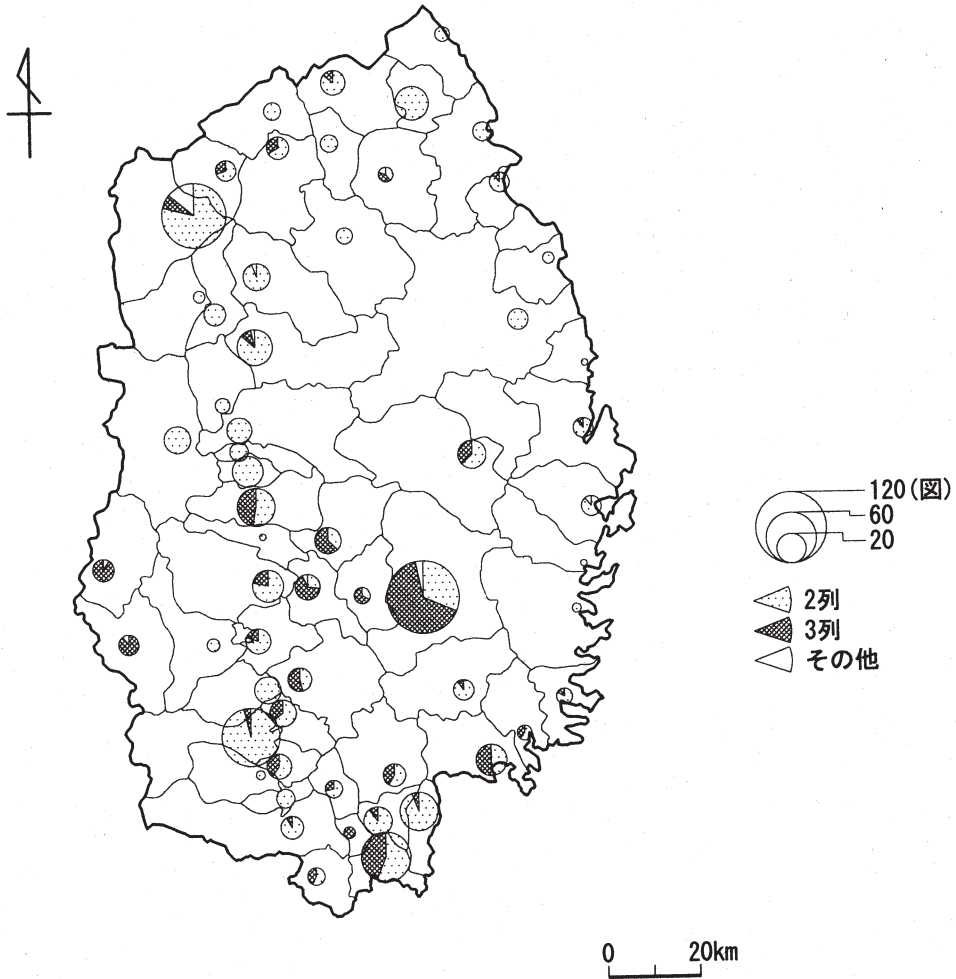


図1 間取り図の列数の旧市町村別分布

いる。一方、これら以外では、調査された間取り図数が少ないことを考慮しても、相対的に3列型が少ない旧市町村が多く、同じ旧郡内でもその分布は必ずしも一様ではない。

3列型が多い地域を見ると、高橋（2022a pp.165-166）で述べたように、遠野市は奥広間と前広間が混在する地域であり、藤沢町と陸前高田市は両広間タイプの典型的間取り、すなわち前広間鍵座敷と奥広間前座敷の中間タイプの間取りが見られる地域である。紫波町もやや特異な前広間奥座敷が分布する地域で、かつ後述するように3列型では奥広間と前広間が混在する地域でもある。また、大迫町や東和町では奥広間が卓越し、前広間は見られないが、両タイプの境界地域にあたっている。このように、和賀郡でも東和町からは離れた奥羽山系に位置する沢内村と湯田村を除くと、いずれも前広間と奥広間の混在地域、接触地域、境界地域にあたっている。一方、県北部および沿岸部の前広間地域や、県南部北上川流域の奥広間地域では、3列型間取りは絶対的にも相対的にもかなり少ないことが分かる。

(2) 3列型の間取り型とその地域的分布

3列型の間取り図257図の各列の室数を示した表2を見ると、下手列、中手列、上手列いずれも2室または3室が多い一方で、1室または4室の間取り図は極めて少ない。本論では、下手列の室数と上手列の室数の組み合わせにより間取り型を規定しているため、分析の都合上、いずれかの列が1室または4室である13図を、以下の分析からは除外することにした。また、室数が不明な1図³⁾と呼称不明な室が多い1図⁴⁾も除外したため、本論で主に分析対象とした3列型の間取り図は、計242図(うち構造図⁵⁾177図)である。

その結果、分析対象とした各間取り型の図数は、2×2型が146図(うち構造図104図)でも多く、全体の60.3%を占めている。次いで、2×3型が43図(うち構造図35図)、3×3型が39図(うち構造図28図)、3×2型が14図(うち構造図10図)の順となっている。

表3には、242図の間取り型別の地域的分布を示した。2×2型は、紫波郡と和賀郡を除く旧南部藩領や旧伊達藩領気仙郡で多く、旧伊達藩領の奥広間地域では少ない。逆に、紫波郡や

表2 3列型間取り図の列別室数

列	(図数)						(構成比)					
	1室	2室	3室	4室	不明	合計	1室	2室	3室	4室	不明	合計
下手列	4	196	57			257	1.6%	76.3%	22.2%			100.0%
中手列	2	130	120	4	1	257	0.8%	50.6%	46.7%	1.6%	0.4%	100.0%
上手列	3	169	84		1	257	1.2%	65.8%	32.7%		0.4%	100.0%

表3 旧郡別にみた間取り型別間取り図数

旧郡	(図数)					(構成比)				
	2×2型	2×3型	3×2型	3×3型	合計	2×2型	2×3型	3×2型	3×3型	合計
九戸郡	4		1		5	80.0%		20.0%		100.0%
二戸郡	10	2			12	83.3%	16.7%			100.0%
岩手郡	1				1	100.0%				100.0%
紫波郡	5	4	1	5	15	33.3%	26.7%	6.7%	33.3%	100.0%
下閉伊郡	6				6	100.0%				100.0%
上閉伊郡	79	1	1		81	97.5%	1.2%	1.2%		100.0%
稗貫郡	11	4			15	73.3%	26.7%			100.0%
和賀郡	8	7	5	9	29	27.6%	24.1%	17.2%	31.0%	100.0%
江刺郡	1	6		6	13	7.7%	46.2%		46.2%	100.0%
胆沢郡		4	1	3	8		50.0%	12.5%	37.5%	100.0%
西磐井郡	1	1			2	50.0%	50.0%			100.0%
東磐井郡	5	14	5	16	40	12.5%	35.0%	12.5%	40.0%	100.0%
気仙郡	15				15	100.0%				100.0%
合計	146	43	14	39	242	60.3%	17.8%	5.8%	16.1%	100.0%

3) 民家番号(以下では民番と略す)415(遠野市大洞家)は、中手列および上手列の室構成がよく分からないため、分析から除外することにした。なお、本論中の各民番の間取り図の初出典に付いては、高橋(2017)および高橋(2022b)の付表を参照願いたい。

4) 民番374(下閉伊郡川井村佐々木家)は、文化財保護委員会編(1965 p.63)によると、「大型の曲屋であったが、昭和10年頃、下手の土間、じょうい、だいどころと曲り部分を取去ってしまった」。また、残った床上部も呼称不明な室が多く、広間タイプ等の判断がつかないため、分析からは除外した。

5) 構造図とは、間取りの空間的構造(分節された空間の機能及びそれらの相対的位置関係や直接的連結関係)がわかる間取り図を指し、間取りの幾何学的形態しか読み取れない形態図と区別している。

和賀郡、気仙郡を除く旧伊達藩領では2×3型や3×3型の上手列3室型が過半を占めている。つまり、2列型の場合と同様に、3列型でも一般に奥広間地域の方が、下手列も上手列も室数が多い傾向にあると言える。

(3) 並列型および横喰違い型とその地域的分布

①並列型と横喰違い型

3列型間取りでは、前記の各列の室数の違いによる間取り型とは別に、室の配置状態に基づく形態の違いが見られる。すなわち、下手列と中手列の間および中手列と上手列の間の境界が共に一直線で、各列が平行に配置される型（以下では、並列型と呼ぶ）と、中手列と上手列の間の境界は一直線だが、下手列と中手列の間の境界が一直線ではなく喰違いっている型（以下では、横喰違い型と呼ぶ）がある。一般に横喰違い型では、下手列奥室（中広間の場合は中室も）および中手列前室の桁行の幅が広いのに対し、下手列前側および中手列奥側の桁行の幅は狭く、下手列と中手列の間の境界は横にずれている。

並列型と横喰違い型の違いは、各列の室数にも現れている。中手列の室数はいずれの型も2室と3室の割合がほぼ半々だが、下手列と上手列については、並列型では3室型が占める割合は各々15.1%、24.0%と低いのに対し、横喰違い型では各々48.0%、72.0%と、共に並列型に比べて明らかに3室型が多い。間取り型との関連を見ると、並列型では特に2×2型が多く、71.4%を占めているが、横喰違い型では18.0%と少ない。逆に、横喰違い型では2×3型が34.0%、3×3型が38.0%と、特に上手列3室型が多い。さらに、後述するように、横喰違い型は奥広間および奥広間系の中広間に限られ、前広間には見られない。中広間の場合には、並列型でも横喰違い型でも各列の室数が3室である割合がかなり高く、あまり差は見られないが、奥広間の場合には、並列型と横喰違い型とでは、前述したような下手列と上手列の室数の明かな違いが認められる。つまり、奥広間タイプでの多室化は、特に横喰違い型で顕著である。

②並列型および横喰違い型の地域的分布

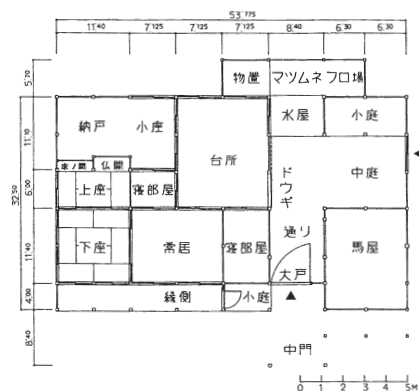
表4に、並列型および横喰違い型の旧郡別分布を示した。3列型間取り図242図のうち、

表4 旧郡別にみた並列型および横喰違い型の間取り図数

旧郡	型	(図数)			(構成比)				
		並列型	横喰違い型		合計	並列型	横喰違い型		合計
			西和賀型	東磐井型			西和賀型	東磐井型	
九戸郡	5			5	100.0%			100.0%	
二戸郡	12			12	100.0%			100.0%	
岩手郡	1			1	100.0%			100.0%	
紫波郡	15			15	100.0%			100.0%	
下閉伊郡	6			6	100.0%			100.0%	
上閉伊郡	81			81	100.0%			100.0%	
稗貫郡	13	2		15	86.7%	13.3%		100.0%	
和賀郡	7	21	1	29	24.1%	72.4%	3.4%	100.0%	
江刺郡	10		3	13	76.9%		23.1%	100.0%	
胆沢郡	8			8	100.0%			100.0%	
西磐井郡	2			2	100.0%			100.0%	
東磐井郡	17		23	40	42.5%		57.5%	100.0%	
気仙郡	15			15	100.0%			100.0%	
合計	192	23	27	242	79.3%	9.5%	11.2%	100.0%	

①西和賀型

和賀郡湯田町菅野家（民番562）



②東磐井型

東磐井郡藤沢町及川家（民番777-2）

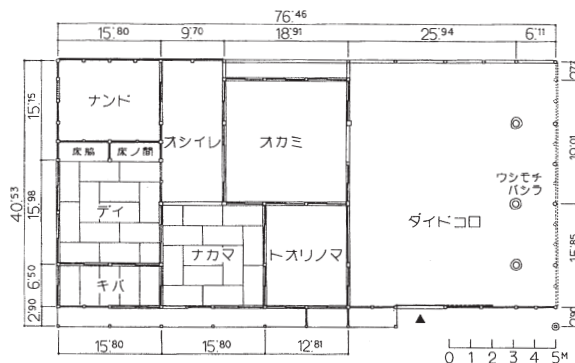


図2 横喰違い型間取りの例

出典：菊池（2003）p.77, p.9

20.7%にあたる50図が横喰違い型であった。これらの分布を見ると、並列型は県内に広く一般的に見られるが、横喰違い型は地域的に限られている。横喰違い型は、稗貫郡（大迫町）から和賀郡（東和町，北上市，沢内村，湯田町），江刺郡（北上市）⁶⁾，東磐井郡（東山町，大東町，川崎村，千厩町，藤沢町）にかけて広がっているが、特に集中しているのは西和賀地方（湯田町，沢内村）と東磐井郡（特に藤沢町）である。しかも、詳細については後述するが、下手列前室が、西和賀地方（和賀郡湯田町，沢内村）では寝室なのに対して、東磐井郡では次の間（中間）になっているという違いが見られる。この違いは、間取り構造の違いにも通じるので、本論では前者を横喰違い西和賀型（以下では、単に西和賀型と記す），後者を横喰違い東磐井型（以下では、単に東磐井型と記す）と呼んで区別することとした。図2には、各横喰違い型の典型的な間取り図を示した。西和賀地方では3列型の間取り図19図すべてが西和賀型で、藤沢町では24図中2/3にあたる16図が東磐井型であった。

このように、横喰違い型は、3列型が多く分布する上閉伊郡をはじめとして、他の旧南部藩領や前広間地域の旧伊達藩領気仙郡には見られず、奥広間地域である旧伊達藩領の北上川流域の低地部にも見られない。横喰違い型は、主に北上高地の丘陵部と奥羽山脈の山間部に限定的に分布している。もっとも、胆沢郡や西磐井郡などの北上川流域の低地部は、調査民家が少ないことが関係していることも考えられる。しかし、東磐井郡千厩町の村上家（民番749-2）を調査した菊池（2003）は、筆者の言う横喰違い型の中手列奥室の細長いネマの遺構について、藤沢町の大型民家や北上や西和賀地方にもみられるが、「一関や胆江地方にはまったくみられない」⁷⁾（p.14）と述べているので、やはり丘陵部に限られるのではなかろうか。

6) 横喰違い型の菅野家（民番572-1・2）は、旧伊達藩領旧江刺郡の北上市口内町にある。

7) 実際には、東磐井型である前出の菅野家（民番572-1・2）や江刺市広瀬の後藤家（民番580-1）は、江刺郡にある。ただし、いずれも低地部ではなく、北上高地の丘陵部に位置している。

3. 3列型の広間タイプ

以下では、3列型間取りの広間タイプを、下手列の室数により2室型と3室型とに分けて分析・考察していく。

(1) 下手列2室型の広間タイプ

①室呼称に基づく広間タイプ

3列下手列2室型の189図のうち、前室の呼称が不明なのが10図、奥室の呼称が不明なのが7図あるが、呼称が記載されている他方の室の呼称や出典の説明、炬の有無、2室の広さの違いなどにより、広間位置を判断した。その結果、表5に示したように、前広間と判断されたのが49図、奥広間と判断されたのが140図で、奥広間の方が3倍近く多い。

前広間の広間呼称で最も多いのは23図の「ジョイ」（ジョウイを含む。以下同様）で、その奥室の多くは「ネマ」（ネベヤ、ネドコ等を含む）やモノオキ等の寝室・収納室呼称である。前広間の呼称で次いで多いのは10図のオカミで、その奥室呼称はすべてカッテである。「ジョイ」は旧南部藩領に広く広がっているが、オカミは気仙郡にのみ分布しており、同じ前広間でも旧藩領によって広間呼称は異なっている。

「ジョイ」やオカミ以外では、「ナカマ」（ナカノマ等を含む）、「チャノマ」（オモテチャノマ等を含む）、「ダイドコロ」（エドコ⁸）を含むが複数みられる。「ナカマ」4図のうち2図（民番811, 839）は気仙郡にあり、奥室は共にカッテである。残り2図（民番412-1, 412-2：遠野市及川家）の奥室呼称は不明だが、佐藤は奥が台所で、前のナカノマがジョイにあたと述べている（遠野市教育委員会編 1977 p.92）。次に、前室がチャノマの3図（民番33, 347, 406-1）の奥室呼称は、各々ダイドコロ、ウラザシキ、モノオキであった。民番33については、チャノマの広さはダイドコロの2倍あり、かつチャノマは土間と直接往来可能だが、ダイドコ

表5 下手列2室型の広間タイプ別室呼称

①下手列前室

室呼称	前広間	奥広間	合計
ジョイ	23		23
チャノマ	3	78	81
ナカマ	4	41	45
オカミ	10		10
ダイドコロ	3	1	4
ネマ		7	7
その他	2	7	9
不明	4	6	10
合計	49	140	189

(注)「ジョイ」は、ジョウイを含む
「チャノマ」は、オモテチャノマ等を含む
「ナカマ」は、ナカノマ等を含む
「ダイドコロ」は、エドコを含む
「ネマ」は、ネベヤ等を含む

②下手列奥室

室呼称	前広間	奥広間	合計
ネマ	19		19
ジョイ		99	99
ダイドコロ	5	4	9
カッテ	14		14
オカミ		24	24
チャノマ		10	10
その他	5	2	7
不明	6	1	7
合計	49	140	189

(注)「ネマ」は、ネベヤ、ネドコ、ナンド等を含む
「ジョイ」は、ジョウイを含む
「チャノマ」は、ナカチャノマを含む

8) エドコ呼称は、岩手郡玉山村の民家を調査した『玉山の古民家』（玉山村教育委員会編 1985）に多数（ただし、ほとんどが2列型間取り）見られる。エドコはイドコ（居所）にも通じるが、他の玉山村の民家を調査した文献では、対応する室の名称がダイドコロであるため、エドコはアエドコに通じると判断した。

口の土間側はマヤで往来不可である。さらに、前室の呼称がダイドコロである3図（民家番号68, 99, 241）の奥室は、すべて寝室・収納室となっている。以上のことから、これらはいずれも前広間であると判断した。

次に、140図ある奥広間の広間呼称では、「ジョイ」が99図と約7割を占め、オカミ（24図）がこれに次ぎ、「チャノマ」（10図）やダイドコロ（4図）も見られる。これらの地域的分布を見ると、「ジョイ」は旧南部藩領の上閉伊郡、稗貫郡、和賀郡（東和町）、ダイドコロは西和賀地方（湯田町、沢内村）に集中的に分布し、共に旧伊達藩領には見られない。一方、オカミと「チャノマ」はほとんどが旧伊達藩領に分布し、オカミは江刺郡と東磐井郡、チャノマは胆沢郡に多い。このように奥広間でも、広間呼称は旧藩領で明確に分かれている。

これらの前室の呼称を見ると、奥室が「ジョイ」の場合は「チャノマ」（75室）が最も多く、これに「ナカマ」（13室）が次ぐが、「ネマ」も4図ある。前室の「チャノマ」は、上閉伊郡を中心に下閉伊郡、稗貫郡、紫波郡に広がっているが、「ナカマ」は和賀郡東和町とその周辺（花巻市、遠野市）に限られている。一方、前室の「ネマ」は、奥室がダイドコロである3図も含めると計7図あり、いずれも西和賀型の間取りである。一方、旧伊達藩領の奥室がオカミや「チャノマ」の場合の前室は、ほとんどが「ナカマ」で次の間となっている。

②構造図の下手列判別分析

まず、3列下手列2室型の139構造図を室呼称に基づいて2つの広間タイプに分類し、広間タイプ毎の下手列2室に関する6つの開放度および前室の相対的広さ（前室割合）の計7変数の平均値と標準偏差を表6に示した。平均値の差の検定を行った所、前室・奥室間、奥室側面、奥室相互、前室割合の4変数で1%水準、前室前面で5%水準での有意な差が認められた。この結果は、2列2×2型の場合とほぼ同様で（高橋2022a p.154）、前広間では前室が広く、かつ奥広間と比べて奥室の閉鎖性が高いことが分かる。

なお、139構造図を中手列が2室の77図と3室の62図に二分し、各々下手列と中手列間の開放度2変数⁹⁾を加えた9変数で同様の分析を行ったところ、新たに前者では下手前室・中手奥室間、下手奥室・中手前室間、後者では下手前室・中手中室間および下手奥室・中手中室間で1%水準での有意差が認められた。この結果は、前広間では下手列奥室と中手列の前室（中手列3室の場合は中室も）との間が往来できないこと、一方奥広間では下手列前室と中手列の奥室（中手列3室の場合は中室も）との間がほとんど往来できないことを示している。

表6 下手列2室型構造図の広間タイプ別下手列の室開放度および前室割合

広間タイプ	前室・奥室間	前室前面	前室側面	奥室側面	前室相互	奥室相互	前室割合	図数
前広間	82.6	91.4	86.6	51.0	94.2	36.1	61.5	30
	27.5	17.3	21.7	40.0	21.0	43.7	8.3	
奥広間	92.7	77.3	77.5	76.1	96.1	77.6	43.4	109
	11.9	28.7	27.6	17.9	17.1	23.2	5.8	
合計	90.5	80.4	79.5	70.7	95.7	68.6	47.3	139
	16.9	27.2	26.7	26.3	17.9	33.4	9.8	

（上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%）

9) 中手列2室の場合も3室の場合も、下手列2室との間に関する開放度は共に8つだが、共通するのは表6にある6つで、さらに前者では下手前室・中手奥室間と下手奥室・中手前室間の2開放度、後者では下手前室・中手中室間と下手奥室・中手中室間の2開放度が加わる。

次に、室呼称に基づく広間タイプの判断の妥当性を検討するため、開放度が一部不明な1図を除いた138構造図を対象に、上記7変数を用いて広間タイプを目的変数(グループ)とする判別分析を行った。判別分析の結果、室呼称に基づく広間タイプと予測された広間タイプが一致したのは138図中133図で、一致率は96.4%であった。一致しなかった5図は、いずれも室呼称からは前広間と判断したが、判別分析では奥広間と予測された。

5図のうち、まず民番36(九戸郡軽米町畑山家)は、前室のイマよりも奥室のガイドコロの方が奥行きが広く¹⁰⁾、奥室側面や奥室相互の開放度が100%であったため、奥広間と予測された。が、炉はイマにあり、畑山家がある軽米町晴山地区の民俗調査を行った東洋大学民俗研究会編(1983)によると、晴山地区の住居の間取りについて、「ニワをすぐ上がった出入り口に近い部屋は客間や居間として使用しており、チャノマ・ジョイなどと呼んでいる」(p.102)と記されているため、民番36も前広間と判断して良いであろう。次に、前出の遠野市綾織町砂子沢の及川家(民番412-1, 412-2)は、奥室(台所)の方が広く、しかも開放的であるが、炉は前室のナカノマにのみある。砂子沢地区の民家を調査した遠野市教育委員会編(1977)では、砂子沢では及川家のような前広間は珍しいと述べられている(p.92)。残りの2図(民番830, 835-1)は気仙郡(陸前高田市)にあり、やはり奥室(カッテ)の開放度が極めて高いために奥広間と予測されたが、いずれも前室のオカミの方が広く、前広間であることに間違いはない。以上のように、これら5図は多少特殊ではあるが、室呼称から判断したとおり、前広間と考えて良いであろう。

さらに、138構造図を中手列が2室の76図と3室の62図とに分け、各々下手列と中手列間の開放度2変数を加えた9変数でも判別分析を行った。中手列2室の場合予測が一致しなかったのは、上記の民番36, 412-1, 412-2の3図に新たに民番823を加えた4図で、一致率は94.7%だった。民番823は気仙郡(陸前高田市)にあり、奥室(カッテ)の開放度が極めて高いため奥広間と予測されたが、前室のオカミの方が広く、炉も有るので、前広間で間違いはないであろう。中手列3室の場合は、下手列2室と中手列中室との開放度も考慮された結果、上記の民番830, 835-1共に前広間と予測され、一致率は100%であった。

(2) 下手列3室型の広間タイプ

①室呼称に基づく広間タイプ

3列下手列3室型の53図について、下手列呼称から広間位置を判断したところ、表7に示したように前広間1図、奥広間19図、中広間33図となった。2列型の場合と比べると、中広間が最も多く、前広間が少ないのは同じだが、2列型ではほとんどみられない奥広間が比較的多い点が異っている。

まず、奥広間の場合、奥室呼称は「ガイドコロ」(デエドコ等を含む)が12図で最も多く、オカミが4図であった。「ガイドコロ」の12図はすべて西和賀地方(和賀郡湯田町、沢内村)に分布し、他呼称(イマ)の1図も含めて、両町村の奥広間13図の中室呼称は、「ネマ」(ネバヤ等を含む)がほとんどである。前室も約半数が「ネマ」で、他ではコドリ(板敷きの物置)¹¹⁾ やコマヤ(飼料置場)¹²⁾ が複数見られる。これらはいずれも西和賀型の間取りである。

10) イマの前側が仕切られて、通路(廊下)のような細長い形態をしているため、ガイドコロよりも奥行きが狭くなっている。

11) 高橋(1998 p.51)による。

12) 熊谷(1967 p.33)による。

表7 下手列3室型の広間タイプ別室呼称

①下手列前室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
ジョイ	1	0	0	1
チャノマ	0	0	2	2
ナカマ	0	3	24	27
ダイドコロ	0	0	1	1
ネマ	0	6	0	6
その他	0	7	5	12
不明	0	3	1	4
合計	1	19	33	53

(注)「ナカマ」は、コナカマ等を含む
「ネマ」は、ネベヤ等を含む

②下手列中室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
オカミ	0	0	19	19
ジョイ	0	0	5	5
チャノマ	0	0	8	8
ネマ	1	11	0	12
その他	0	6	1	7
不明	0	2	0	2
合計	1	19	33	53

(注)「ジョイ」は、ジョウイを含む
「ネマ」は、ネベヤ等を含む

③下手列奥室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
ネマ	0	0	10	10
ジョイ	0	2	0	2
ダイドコロ	0	12	0	12
カッテ	1	0	12	13
オカミ	0	4	0	4
その他	0	1	8	9
不明	0	0	3	3
合計	1	19	33	53

(注)「ネマ」は、ネベヤ、ナンド等を含む
「ジョイ」は、ジョウイを含む
「ダイドコロ」は、デエドコ等を含む
「カッテ」は、シモカッテを含む

一方、4図あるオカミの前室および中室は、共にナカマ等の次の間になっており、うち3図は東磐井型の間取りである。

次に、中広間の中室の広間呼称は、オカミが19図で最も多く、次いでチャノマが8図、「ジョイ」(ジョウイを含む)が5図となっている。オカミとチャノマは東磐井郡を中心に旧伊達藩領に広がっているが、「ジョイ」は旧南部藩領の紫波郡に限られている。また、前者の前室はほとんどが「ナカマ」(コナカマ等を含む)で、奥室は「カッテ」(シモカッテを含む)とナンド・ナンドロウが多い。一方、後者の前室はチャノマ、ホラ・ホラジタ、奥室はカッテ、ネドコが複数見られる。このように、同じ中広間でも、地域によって下手列の室呼称だけでなく、室機能も異なっている。

なお、唯一前広間と判断した民番345(紫波郡紫波町山田家)の下手列は、前室が広いジョイで、中室(ネドコ)と奥室(カッテ)はかなり狭くなっている。

②構造図の下手列判別分析

まず、3列下手列3室型の37構造図を室呼称に基づいて3つの広間タイプに分類し、広間タイプ毎の下手列3室に関する8つの開放度と前室および奥室の相対的広さの計10変数について

表8 下手列3室型構造図の広間タイプ別下手列の室開放度および室割合

広間タイプ	前室・中室間	中室・奥室間	前室前面	前室側面	中室側面	奥室側面	前室相互	奥室相互	前室割合	奥室割合	図数
前広間	60.0	0.0	80.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	63.6	9.1	1
奥広間	75.0	96.7	61.7	70.0	58.0	79.2	80.0	65.7	28.2	47.1	10
	42.5	10.4	45.9	42.2	50.3	15.4	42.2	34.0	8.2	7.1	
中広間	98.4	96.0	84.9	76.0	89.2	84.1	98.1	86.4	37.3	21.6	26
	5.8	11.9	25.6	34.3	15.3	25.2	9.8	29.8	5.1	4.6	
合計	91.0	93.6	78.5	75.0	81.1	83.2	93.2	78.5	35.5	28.1	37
	24.7	19.4	33.0	35.9	31.6	22.6	24.0	34.2	8.6	13.0	

(注) 変数によっては、開放度が不明な図が1図ある。(上段:平均 下段:標準偏差 図数以外の単位は%)
前広間タイプは図数1のため、標準偏差は算出不能。

て、その平均値と標準偏差を表8に示した。平均値の差の検定を行った所、中室・奥室間、前室割合、奥室割合の3変数で1%水準、前室・中室間、中室側面、奥室相互で5%水準での有意差が認められた。構造図には前広間は1図しかないものの、広間タイプによって、各室の相対的広さが明らかに異なるだけでなく、各室の開放度にも違いが認められる。ただし、2列3×3型の場合と同様に（高橋2022b p.270）、前広間と比べると、奥広間と中広間の違いは小さい。

次に、呼称に基づく広間タイプの判断の妥当性を検討するために、室開放度が一部不明な1図を除く36構造図を対象に、10変数を用いて広間タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果、36図中35図で、室呼称に基づく広間タイプと予測された広間タイプは一致した。一致しなかった1図（民番636 胆沢郡胆沢町佐々木家）は、奥室呼称がオカミであることから奥広間と判断したが、中広間と予測された。オカミの広さは3畳で¹³⁾、3室の中で最も狭く、中室のナカマは4.5畳、前室のオモテナカマが6畳で最も広い。かついずれの室も開放的なため、奥室が閉鎖的な前広間ではなく、中広間と予測されたものと推測される。胆沢郡には3列型は少なく、3列下手列3室型も民番636以外には3図しかないが、いずれも中室がオカミの中広間であることを考慮すると、民番636も奥広間ではないのかもしれない。

(3) 広間タイプの地域的分布

下手列2室型と3室型の旧郡別の地域的分布を表9に示した。2室型の前広間は、稗貫郡と和賀郡を除く旧南部藩領と旧伊達藩領の気仙郡に広く分散しているが、奥広間は旧南部藩領の上閉伊郡、稗貫郡、和賀郡に集中的に分布する一方で、旧伊達藩領内にも広く分散している。前広間と奥広間のすみわけの地域的なパターンは、基本的に2列型間取りの場合とほぼ同じである。

次に、下手列3室型が分布しているのは、紫波郡を除けば基本的に奥広間が卓越する地域であるが、3室型では奥広間より中広間の方が多い。特に旧伊達藩領では奥広間は少なく、大半

表9 旧郡別にみた広間タイプ別間取り図数

旧郡	下手列2室型		下手列3室型			3列型計			合計
	前広間	奥広間	前広間	奥広間	中広間	前広間	奥広間	中広間	
九戸郡	4				1	4		1	4
二戸郡	12					12			12
岩手郡	1					1			1
紫波郡	4	5	1		5	5	5	5	15
下閉伊郡	3	3				3	3		6
上閉伊郡	11	69		1		11	70		81
稗貫郡		(2)15					(2)15		(2)15
和賀郡		(8)15(1)		(13)14			(21)29(1)		(21)29(1)
江刺郡		7(3)			6		7(3)	6	13(3)
胆沢郡		4		1	3		5	3	8
西磐井郡		2					2		2
東磐井郡		19(12)		3(3)	18(8)		22(15)	18(8)	40(23)
気仙郡	14	1				14	1		15
合計	49	(10)140(16)	1	(13)19(3)	33(8)	50	(23)159(19)	33(8)	(23)241(27)

(注) 図数の左()内は西和賀型の内数、右()内は東磐井型の内数である。

13) ただし、オカミの奥側には細長いロウカがあり、両者を合わせると4.5畳となる。

が中広間である。このことは、高橋（2022b）が2列の下手列3室型（3×2型および3×3型）で指摘したように（p.261, p.275）、奥広間が卓越する地域では、3列型でも下手列2室型の奥広間から、3室型の中広間へと発展した可能性を示唆している。一方、3室型の奥広間は、19図中14図が旧南部藩領和賀郡に集中し、その大半は西和賀型である。そもそも本データベースにある西和賀地方の間取り図は、下手列2室型も含めてほとんどが3列型の西和賀型間取りであり、西和賀地方は奥広間卓越地域の中でも他地域とは一線を画している。

4. 3列型の座敷タイプ

以下では、3列型間取りの座敷タイプを、上手列の室数が2室の場合と3室の場合に分けて分析・考察していく。呼称不明な室については、畳敷きかどうか、床の間の有無、出典の記述などをもとに判断した。ただし、奥室の呼称が不明で、座敷か寝室かが判断不能な形態図1図（民番47）は、以下の座敷タイプおよび間取りタイプの分析からは除いたので、分析対象間取り図数は241図である。

（1）上手列2室型の座敷タイプ

①室呼称に基づく座敷タイプ

3列上手列2室型159図の上手列前室の呼称を見ると、ザシキが55図で最も多く、「シタザシキ」（シモザシキ等を含む）の31図、「デトザシキ」（デドザシキを含む）の15図など、ザシキが付く呼称が全部で137図で、86.2%を占めている。一方、2列2×2型では多く見られたダイが付く呼称はわずか8図であった。呼称不明の図を除けば、これら以外の図もすべてキヤクマ等の座敷呼称やナカマ等の次の間呼称であり、寝室・収納室を示す呼称はなかった。

次に、奥室の呼称を見ると、「オクザシキ」（オクノザシキを含む）が67図、次いでザシキ19図、「カミザシキ」（ウエザシキを含む）18図、「イリザシキ」（イリノザシキを含む）11図などザシキが付く呼称が134図で、84.3%を占めた。一方、2列型では多かったナンドは4図で、ネマ等も含めて寝室・収納室呼称は9図のみであった。

このように、前室、奥室共にほとんどが座敷呼称の室であったため、159図の93.7%にあたる149図が鍵座敷と判断された¹⁴⁾。残りは、奥室が寝室・収納室である前座敷が9図、前室が寝室である奥座敷は1図（民番338）¹⁵⁾であった。2列型と比較すると、3列上手列2室型では圧倒的に鍵座敷が多いことが分かる。

14) もちろん、一般的に座敷呼称でも実質は閉鎖的な寝室である場合も少なくないが、上手列2室型の114構造図の前室・奥室間の開放度を見ると、鍵座敷と判断される107図のうち1図のみ80%で、奥室呼称がウラザシキの3図を含めて、他の図はすべて100%であった。ただし、前室前面、前室側面、奥室側面については、0%等の低い開放度の図が多少あり、その室は普段寝室としても利用されている可能性もある。

15) 民番338（紫波町紫波町田村家）の前室の呼称は不明だが、出典の文化財保護委員会編（1965 p.37）では、「座敷が一室でその表側が寝室になるのは県の中央部一帯にみられる間取り」であると述べられているので、奥座敷と判断した。ただし、佐藤巧・古建築研究会編（2005）の同家の間取り図（p.173）では、当該の室には「下座敷」と記され、また、「下座敷の室内に、未だ上屋柱の省略が進まず、依然として独立上屋柱が建ち、寝所としての性格が強い、古式のものもある」（p.66）例の1つとして、田村家が取り上げられている。

②構造図の上手列判別分析

3列上手列2室型の114構造図を室呼称に基づいて3つの座敷タイプ（鍵座敷107図、前座敷6図、奥座敷1図）に分類し、座敷タイプ毎の上手列2室に関する6つの開放度および前室の相対的広さ（前室割合）の計7変数の平均値の差の検定を行った所、前室・奥室間、奥室側面の2変数で1%水準、前室側面で5%水準での有意差が認められた。前座敷は奥室が寝室となるため、奥室の閉鎖性が極めて高い。

次に、呼称に基づく座敷タイプの判断の妥当性を検討するために、上記7変数を用いて座敷タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。判別分析の結果、室呼称に基づく座敷タイプと予測された座敷タイプが一致したのは、114図中113図で、一致率は99.1%であった。唯一一致しなかったのは、6図ある前座敷のうちの1図（民番561和賀郡湯田町熊沢家）で、鍵座敷と予測された。熊沢家の前室の呼称はザシキで、奥室がヘヤであることから前座敷と判断したが、前室・奥室間の開放度が100%、奥室側面が60%と、奥室の開放度が高い。しかし、ヘヤが座敷にあたるとは考えにくい。

なお、3列上手列2室型を中手列が2室の場合と3室の場合に分け、各々の中手列と上手列間の開放度2変数¹⁶⁾を加えた9変数で同じように分析を行った所、平均値の差の検定ではほぼ上記と同様の結果が、判別分析での予測ではまったく同じ結果が得られた。

(2) 上手列3室型の座敷タイプ

①室呼称に基づく座敷タイプ

3列上手列3室型の82図について、上手列の室呼称に基づいて座敷タイプを判断した結果を表10に示した。最も多いのが64図の前座敷で、ほとんどが前室および中室共に座敷呼称（一部

表10 上手列3室型の座敷タイプ別室呼称

①上手列前室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	合計
シタザシキ	1	19	0	20
ザシキ	0	9	0	9
他ザシキ	5	7	0	12
デイ	0	15	0	15
キバ	1	11	0	12
ネマ	0	0	9	9
その他	1	2	1	4
不明	0	1	0	1
合計	8	64	10	82

(注)「シタザシキ」は、シモザシキ等を含む
 「他ザシキ」は、マエザシキ等を含む
 「デイ」は、コデイ等を含む
 「ネマ」は、ネベヤ、ネドコ等を含む

②上手列中室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	合計
オクザシキ	1	9	0	10
カミザシキ	0	15	0	15
ナカザシキ	3	0	0	3
シタザシキ	3	0	7	10
ザシキ	0	11	1	12
他ザシキ	1	2	0	3
デイ	0	24	2	26
その他	0	3	0	3
合計	8	64	10	82

(注)「カミザシキ」は、カミザを含む
 「シタザシキ」は、シモザシキを含む
 「他ザシキ」は、ホトケザシキ等を含む
 「デイ」は、オオデイ、オオデ等を含む

③上手列奥室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	合計
オクザシキ	4	0	2	6
カミザシキ	2	0	4	6
ザシキ	1	0	1	2
他ザシキ	0	2	1	3
ナンド	0	51	0	51
ネマ	0	7	0	7
その他	1	2	2	5
不明	0	2	0	2
合計	8	64	10	82

(注)「オクザシキ」は、オクザを含む
 「カミザシキ」は、ウエザシキを含む
 「他ザシキ」は、ウラザシキ等を含む
 「ナンド」は、オクナンドを含む
 「ネマ」は、ネベヤ、オヘヤ等を含む

16) 中手列2室の場合も3室の場合も、上手列2室に関する開放度は共に8変数だが、共通するのは6変数で、前者の中手前室・上手奥室間と中手奥室・上手前室間が、後者では中手中室・上手前室間と中手中室・上手奥室間に置き換わる。

は次の間呼称)の2座敷で、床の間は中室にある。それらの奥室の呼称は大半がナンドで、他にもほとんどが寝室・収納室呼称である¹⁷⁾。1図(民番560)のみ、奥室がナンド、中室がモノオキで、座敷は前室1室のみであった。

一方、鍵座敷と判断されたのは8図で、いずれも奥、中、前の3室とも座敷呼称で¹⁸⁾、かつ床の間は奥室にある。また、奥座敷と判断したのは10図で、いずれも奥室、中室ともに座敷呼称で、前室は寝室等¹⁹⁾になっている。

②構造図の上手列判別分析

上手列3室型の62構造図を室呼称に基づいて3つの座敷タイプに分類し、座敷タイプ毎の上手列3室に関する8つの開放度と前室および奥室の相対的広さの計10変数の平均値と標準偏差を表11に示した。平均値の差の検定を行った結果、前室・中室間を除く9変数で1%水準での有意な差が認められた。前座敷は、奥室が寝室となるため、奥室は狭く、閉鎖性が極めて高い。一方、奥座敷は前室が寝室となるため、前室は狭く、閉鎖性が高い。また、鍵座敷は、3室とも開放的である。このため、座敷タイプによって各開放度等に明かな違いが見られることになった。

なお、間取り図を中手列が2室と3室とに分け、前者では中手列と上手列の開放度に関わる2変数、後者では5変数を加えて同様の分析を行った。中手列3室(構造図数43)の場合は、ほぼ上記と同じ結果が得られたが、中手列2室(構造図数19)の場合は、前座敷が16図で、鍵座敷は2図、奥座敷は1図だったことが影響してか、1%で有意な差が認められたのは3変数のみであった。

次に、呼称に基づく座敷タイプの判断の妥当性を検討するために、一部の開放度が不明な2図を除く60構造図を対象に、上記10変数を用いて座敷タイプを目的変数(グループ)とする判別分析を行った。その結果、室呼称に基づく座敷タイプと予測された座敷タイプが一致したのは、60図中57図で、一致率は95.0%であった。一致しなかったのは、室呼称からは鍵座敷と判

表11 上手列3室型構造図の座敷タイプ別上手列の室開放度および室割合

座敷タイプ	前室・中室間	中室・奥室間	前室前面	前室側面	中室側面	奥室側面	前室相互	奥室相互	前室割合	奥室割合	図数
鍵座敷	100.0	100.0	89.5	37.5	100.0	84.3	75.0	50.0	20.1	44.7	4
	0.0	0.0	12.6	47.9	0.0	14.1	50.0	57.7	4.4	3.3	
前座敷	100.0	8.0	79.7	70.6	75.3	11.5	97.0	74.4	29.0	26.1	49
	0.0	18.6	25.1	41.3	20.4	27.2	9.3	35.6	8.0	6.5	
奥座敷	94.4	100.0	25.2	11.1	97.8	78.6	35.6	29.7	19.4	49.1	9
	16.7	0.0	41.0	33.3	6.7	16.0	41.9	32.3	5.8	2.9	
合計	99.2	27.3	72.4	59.8	80.1	26.4	86.6	66.2	27.0	30.6	62
	6.4	41.2	33.4	45.5	20.6	38.0	30.0	39.7	8.4	10.7	

(上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%)

17) 民番595-1・2(水沢市千葉家)の奥室はウラザシキであるが、床の間がある中室(オクザシキ)とは壁で仕切られているため、奥室は寝室と判断した。

18) ただし、民番333(紫波郡紫波町鷹嘴家)の前室の呼称は、供侍(ともまち)部屋と出典(菊地2003 p.120)には記載されている。供侍部屋の梁行方向の幅は1間と狭く、奥室と中室の側面には縁側が付いているが、前室には付いていない。しかし、鷹嘴家の供侍部屋は極めて開放的で、前面側の一部には表玄関が付いているので、次の間と判断して鍵座敷に分類した。

19) 民番751(東磐井郡室根村遠藤家)の前室は、ハタオリバとなっている

断したが判別分析では奥座敷と予測されたのが1図（民番95）、逆に奥座敷と判断したが鍵座敷と予測されたのが2図（民番334, 751）あった。

民番95（二戸郡安代町斎藤家）は、前室（コザシキ）が閉鎖的なため、鍵座敷ではなく奥座敷と予測された。しかし、民番95の出典の有賀（1939 p.336）には、コザシキは畳敷きの玄関座敷で、平素は若夫婦の寝室であるとある。また、安代町史編さん委員会編（2009 p.412）には、コザシキには昔は殿様の玄関があったとあるので、民番95は鍵座敷と判断してよからう。次に、民番334（紫波郡紫波町滝浦家）の前室呼称はネベヤで、若夫婦の部屋である（紫波町教育委員会編 1989 p.19）というが、その前面はほぼ開放されている。また、民番751（東磐井郡室根村遠藤家）の前室はハタオリバで、室4面の開放度はすべて100%である。つまり、これら2図は、共に奥座敷であることに間違いはないが、奥座敷としては前室の開放度がかなり高いために、鍵座敷と予測されたのであろう。

なお、平均値の差の検定の場合と同様に、上手列3室の構造図を中手列の室数毎に分けて、別々に判別分析による予測を行ったところ、前述の民番751のみ予測と一致しなかったが、民番95と民番334は、判別分析に使用した開放度に関する変数が増えたことによって、室呼称に基づく判断と予測は一致した。

（3）座敷タイプの地域的分布

表12より、座敷タイプ別の地域的分布を見ると、上手列2室型の鍵座敷は、旧南部藩領の上閉伊郡（特に遠野市）を中心に、その周辺の稗貫郡や和賀郡をはじめとする旧南部藩領に広く分散する一方で、旧伊達藩領の気仙郡（特に陸前高田市）や東磐井郡（特に藤沢町）にも多少まとまって分布している。前座敷は9図中5図が西和賀地方に集中している以外は分散している。奥座敷は1図（民番338）のみであるが、2列型でも奥座敷が多い紫波郡に分布している。

次に、上手列3室型の地域的分布を見ると、前座敷は旧南部藩領の稗貫郡、和賀郡から旧伊達藩領の江刺郡、胆沢郡、東磐井郡にかけて広がっている。基本的にこれらの地域は、2列型でも前座敷が多い地域である。奥座敷は10図中7図が紫波郡（紫波町）に集中しており、これも2列上手列3室型（特に2×3型）の場合と同様である。一方、鍵座敷は図数が少ないこと

表12 旧郡別にみた座敷タイプ別間取り図数

座敷タイプ 旧郡	上手列2室型			上手列3室型			3列型計			合計
	鍵座敷	前座敷	奥座敷	鍵座敷	前座敷	奥座敷	鍵座敷	前座敷	奥座敷	
九戸郡	4						4			4
二戸郡	10			2			12			12
岩手郡	1						1			1
紫波郡	5		1	2		7	7		8	15
下閉伊郡	6						6			6
上閉伊郡	78	2				1	78	2	1	81
稗貫郡	(2)11				4		(2)11	4		(2)15
和賀郡	(3)8	(5)5			(13)16(1)		(3)8	(18)21(1)		(21)29(1)
江刺郡	1				12(3)		1	12(3)		13(3)
胆沢郡		1		1	6		1	7		8
西磐井郡	1			1			2			2
東磐井郡	9(3)	1(1)		2	26(19)	2	11(3)	27(20)	2	40(23)
気仙郡	15						15			15
合計	(5)149(3)	(5)9(1)	1	8	(13)64(23)	10	(5)157(3)	(18)73(24)	11	(23)241(27)

(注) 図数の左（ ）内は西和賀型の内数、右（ ）内は東磐井型の内数である。

もあって、その分布は分散しており、地域的なまとまりはない。

上手列2室型と3室型の地域的分布を比較すると、2室型が多く見られる地域では3室型は少なく、逆に3室型が多い地域では2室型は少ない。和賀郡では両型共に多いように見えるが、2室型鍵座敷のほとんどは東和町に分布し、3室型前座敷の16箇中13箇は西和賀地方に分布している。また、2室型では鍵座敷がほとんどを占めているが、2室型が多い地域は2列型でも鍵座敷が多い地域でもある。一方、3室型の多くは前座敷だが、3列型の前座敷が多い地域は、2列型でも前座敷が多い地域である。同様に2列型では奥座敷が集中分布している紫波郡には、3列上手3室型の奥座敷も集中している。

このように、3列化して座敷や寝室等の室数が増えても、基本的には2列型の座敷タイプを踏襲している。前座敷や奥座敷の場合には、3列化する際単に座敷数を増やすだけならば、上手列を2室型の鍵座敷にすることも可能であり、そのような例もあるであろう。しかし、鍵座敷は無論のこと、前座敷や奥座敷でも、基本的に元の座敷タイプを維持したまま座敷を2室に増やして、上手列を3室化している。2列型では鍵座敷と奥座敷が混在している紫波郡でも、3列2室型は鍵座敷に、3列3室型は奥座敷に特化していることもその現れであろう。また、上手列2室型を合わせても、全241箇の中で座敷が前座敷または奥座敷の1室のみなのはわずか11箇(4.6%)で、ほとんどの3列型間取りの上手列には座敷が少なくとも2室ある。つまり、3列化の目的の一つには、2列型の座敷タイプを踏襲したまま座敷を2室化することがあると考えられる。

5. 3列型の中手列

前述したように、間取りタイプの判断では中手列を考慮しないことにしたが、その室機能や下手列及び上手列との関係を分析・考察することは必要である。そこで、以下ではそれらについて論じてみたい。

(1) 室呼称にもとづく中手列の室機能

まず、中手列の室数に応じて2つの型に分類して、各室の機能を明らかにする。

①中手列2室型

中手列が2室である124箇のうち、前室呼称が不明な9箇を除く115箇の前室呼称を見ると、「ナカマ」(ナカノマ等を含む)が48箇、「チャノマ」(ナカチャノマ等を含む)が21箇、「ザシキ」(ナカザシキ等を含む)が21箇など、次の間および座敷の呼称が多くを占めている。一方、ナンドやネバヤ等の寝室・収納室の呼称は6箇で、奥広間タイプでのみ見られた。さらに、「ジョイ」(ジョウイを含む)も6箇見られるが、いずれも西和賀地方の西和賀型民家である。

次に、奥室について呼称不明17箇を除く107箇を見ると、「ナンド」(ナカナンド等を含む)が36箇、「ネマ」(ネバヤ等を含む)が38箇、「オシイレ」(オシコミを含む)が6箇で、寝室・収納室が約3/4を占め、他では奥広間タイプでウラザシキやコザシキなどのザシキが付く呼称が目立つ。

以上のように、広間タイプによって多少の違いはあるが、中手列2室型では、基本的に前室は次の間や座敷、奥室は寝室・収納室に利用されていることがわかる。

②中手列3室型

中手列が3室である118図のうち、前室呼称が不明な10図を除く108図の前室呼称を見ると、「ナカマ」49図、「ザシキ」20図、「チャノマ」14図などとなっており、ナンド等の寝室・収納室は4図のみであった。また、「ジョイ」も10図あるが、いずれも西和賀地方の西和賀型民家である。

次に、中室の呼称を見ると、呼称不明の18図を除いた100図中、「ネマ」37図で、「ナンド」19図、「トコノマ」（トゴロマを含む）²⁰⁾ 9図、「オシイレ」7図など、寝室・収納室が過半を占めている。他には、ザシキが付く呼称が11図あった。

また、奥室の呼称を見ると、呼称不明の18図を除いた100図中、「ナンド」40図、「ネマ」29図で、寝室・収納室が多数を占めている。他ではコザ・コンザ（7図）ヤブツマ（4図）が目立つ。

以上のように、中手列2室型と同様に3室型でも、前室は大半が次の間や座敷、奥室は多くが寝室・収納室となっている。また、中室も奥室と同様に寝室・収納室が多い。なお、いずれの型でも、西和賀地方の西和賀型民家の中手列前室には、広間呼称の「ジョイ」が用いられているが、これについては後の節で検討する。

(2) 中手列の室数

次に、表13に中手列の室数と下手列および上手列の室数との関連を示した。表を見ると、下手列の場合も上手列の場合も、その室数が2室の場合は中手列の室数も2室、その室数が3室の場合は中手列も3室をとることが多いことが分かる。 χ^2 検定の結果も、いずれの表も1%水準で有意であった。

表13 下手列および上手列の室数と中手列室数との関係

①下手列室数と中手列室数

中手列 下手列	(図数)			(構成比)		
	2室	3室	合計	2室	3室	合計
2室	114	75	189	60.3%	39.7%	100.0%
3室	10	43	53	18.9%	81.1%	100.0%
合計	124	118	242	51.2%	48.8%	100.0%

②上手列室数と中手列室数

中手列 上手列	(図数)			(構成比)		
	2室	3室	合計	2室	3室	合計
2室	97	63	160	60.6%	39.4%	100.0%
3室	27	55	82	32.9%	67.1%	100.0%
合計	124	118	242	51.2%	48.8%	100.0%

さらに、表14で下手列の室数別に広間タイプとの関係を見ると、下手列2室型の場合、前広間タイプでは26.5%が中手列が3室型なのに対し、奥広間タイプでは44.3%と相対的に中手列3室型が多く、 χ^2 検定の結果も5%水準で有意であった。また、下手列3室型には前広間は極めて少なく、大半が奥広間と中広間で、各々中手列が3室である割合が73.7%、84.8%とかなり高い。つまり、一般的に言って、前広間タイプよりも奥広間タイプや奥広間系の中広間タ

20) 中手列に「トコノマ」がある9図は、東磐井郡藤沢町および大東町と気仙郡陸前高田市にある。前出の図2の藤沢町及川家（民番777-2）を調査した菊地（2003）は、「ナカマからみて裏は縦に細長いオシイレ（あるいは「とこのま（寝室）」）で、東磐井地方の大型の民家にみられる」（p.8）と述べている。同様の記述は、東北大学建築学科佐藤巧研究室編（1978 p.101）にも見られる。また、東磐井郡大東町菊池家（民番880）のトコノマは、「床の間」ではなく、「寝床の間」の意味で、主人夫婦の寝部屋として使われたという（菊地2018 p.131）。さらに、東北工業大学建築学科建築史研究室編（1986 p.40）によると、藤沢町岩渕家（民番776-2）のトゴロマはナンドであるという。

表14 広間タイプおよび座敷タイプと中手列室数との関係

①下手列室数別広間タイプと中手列室数

下手列	中手列 広間 タイプ	(図数)			(構成比)		
		2室	3室	合計	2室	3室	合計
2室	前広間	36	13	49	73.5%	26.5%	100.0%
	奥広間	78	62	140	55.7%	44.3%	100.0%
	合計	114	75	189	60.3%	39.7%	100.0%
3室	前広間		1	1		100.0%	100.0%
	奥広間	5	14	19	26.3%	73.7%	100.0%
	中広間	5	28	33	15.2%	84.8%	100.0%
	合計	10	43	53	18.9%	81.1%	100.0%

②上手列室数別座敷タイプと中手列室数

上手列	中手列 座敷 タイプ	(図数)			(構成比)		
		2室	3室	合計	2室	3室	合計
2室	鍵座敷	91	58	149	61.1%	38.9%	100.0%
	前座敷	4	5	9	44.4%	55.6%	100.0%
	奥座敷	1		1	100.0%		100.0%
	合計	96	63	159	60.4%	39.6%	100.0%
3室	鍵座敷	3	5	8	37.5%	62.5%	100.0%
	前座敷	22	42	64	34.4%	65.6%	100.0%
	奥座敷	2	8	10	20.0%	80.0%	100.0%
	合計	27	55	82	32.9%	67.1%	100.0%

タイプの方が中手列は3室化しやすいことが分かる。一方、同様に上手列の室数別に座敷タイプと中手列室数との関係を見たが、両者の間には明確な関連は認められなかった。

このように、2列型では基本的に奥広間タイプの方が前広間タイプよりも多くの室数を必要とするため、上手列が3室化しやすいが²¹⁾(高橋2022b p.275)、3列型の場合も同様に奥広間タイプおよび奥広間系の中広間タイプは、前広間タイプに比べて多室化しやすいことが、中手列の室数にも現れている。

(3) 西和賀型の広間タイプの再検討

前述したように、西和賀型民家には、中手列前室呼称が「ジョイ」である間取りが多い。これまで暗黙に広間は下手列にあることを前提としてきたが、中手列に広間がある可能性もある。この問題については、高橋(2017 p.11)でも多少ふれたが、改めて検討してみたい。

西和賀型間取り図23図のうち、中手列前室の呼称が「ジョイ」²¹⁾であるのが16図あり、その下手列奥室の呼称はイマが2図あるが、他14図はすべてガイドコロである。また、中手列前室の呼称が不明な1図の下手列奥室呼称もガイドコロである。これら17図の間取り図は、すべて西和賀型の核心地域である西和賀地方(和賀郡湯田町、沢内村)に位置している。しかし、西和賀型でかつ下手列奥室呼称がジョウイである図が、周辺地域にあたる和賀郡東和町や稗貫郡(大迫町)に4図(民番502, 504, 533, 536)、西和賀地方にも2図(民番551, 558-1)の計6図ある。これらの中手列前室の室呼称は、イマ、ナカマ等になっている。つまり、いずれも横喰違い型で下手列前室に寝室を配置するという間取りは酷似しているのに、一般には広間を意味する「ジョイ」が付く室の位置が異なっており、呼称の混乱が生じている。

既存の調査報告書でも西和賀型民家の広間位置についての見解は分かれている。吉田(1985)は、民番561(湯田町熊沢家)の間取りについて、中手列前室のジュイを広間、下手列奥室のガイドコロを勝手と解している(図版p.100)。また、民番562(湯田町菅原家)の復原修理報告書(佐藤巧・古建築研究会編 2005)では、湯田町、沢内村地域の農家においては、前面の「常居」とは別に、その背後には「居間」があるのが一般的であると述べ、菅原家の下手列奥室の台所は、その位置、形状、機能からみて「居間」と呼ぶものと同じとみてよいとしている(p.121)。さらに、「湯田町、沢内村においては、「前-常居」、「後-居間」、即ち齊し

21) ジョイが7図、ジョウイが6図、ジョエ、ジュイ、ジャエが1図ずつある。

く「前-常居」型²²⁾民家に属すると言って良い」(p.121)と述べている。また、湯田町と沢内村を除く他の和賀郡(東和町、和賀町、江釣子村、北上市)や、その北に位置する稗貫郡、逆に南に位置する旧伊達藩領の江刺市、胆沢郡、東・西磐井郡のいずれも「後-常居」型²³⁾であることから、湯田町、沢内村は「頗る例外的な事例」(p.122)であるとも述べている。ところが、同報告書ではまた、「和賀郡湯田町、沢内村の「居間」(菅原家の「台所」)を「常居」の語に、「常居」の語を「居間」、「茶の間」、「中の間」と同義語とみれば、ここでの「前-常居」型を「後-常居」型と読み易えることも可能で、そのときは、この地もまた「後-常居」型に属し、敢えて「前-常居」型として例外視する必要もない。そのときは呼称上はさておき、実態としては同じく「後-常居」型民家と言えよう」(p.122)とも述べており、佐藤らの見解は定まっていない。

それに対して、佐藤と同じ菅原家(民番562)を調査した菊地(2003 p.76)は、下手列奥室のダイドコロが日常生活の部屋で、中手列前室のジョウイは接客用の部屋であったと述べている。また、沢内の民家を調査した宮内(1965 p.43)は、雫石の曲家と北上、江刺の直家のダイドコロはニワ空間の機能分化によって生じたものだが、沢内のダイドコロはにわとは分離した独立した空間で、日常生活の主室であり、ジョウイは家族の居室であると述べている。『沢内物語』を表した高橋(1998 p.53)も、デエドコ(ダイドコロ)には大きな炉があり、一家団欒の中心であり、家族は寝につくまでデエドコで過ごしたと述べている。西和賀地方の近世民家を調査した羽柴(1993 p.89)も、ダイドコロは居間といった日常生活の空間で、ジョウイは神棚が置かれ接客のための空間であると述べている。また、沢内村史編さん委員会編(1994 p.1536)では、横座、カカ座、客座、木の尻場の座席名が付いた炉が、下手列奥室のデエドコ(台所)にある間取り図(民番556)が掲載されている。

さらに、本データベースで、西和賀型23図の下手列奥室と中手列前室の広さや炉の有無、板敷きか畳敷きかななどを比較すると、両室間に違いがない図も多い。が、下手列奥室の方が中手列前室よりも広いのが11図で、その逆なのが4図ある。また、下手列奥室に炉があるのは10図で、そのうちの4図は中手列前室にも炉があるが、中手列前室にだけ炉がある図はない。さらに、下手列奥室が板の間で、中手列前室が畳敷きである図が3図あるが、その逆の図はない。

以上のことを総合的に判断すると、佐藤らが述べたように、呼称上はさておき、実態としては西和賀型は奥広間タイプなのではなかろうか。したがって、西和賀型についての広間タイプの判断は前述の通りで良いと考えられる。

(以下次号に続く)

22) 本研究の前広間タイプにあたる。

23) 本研究の奥広間タイプにあたる。